

令和6年度 第67回 関東高校サッカー大会県予選 大会総評

報告者：高体連技術部員 南稜高校 横山晃一

1 大会概要

4月13日から29日にかけて令和6年度関東高校サッカー大会埼玉県予選が開催された。この大会は1月から2月にかけて行われた新人大会各支部予選を勝ち上がった24チーム（このうち、プリンスリーグ関東に出場する西武台高校は辞退）に、昨年度の全国高校サッカー選手権大会埼玉県予選でベスト8まで勝ち残ったチーム（このうち、プレミアリーグ東日本に出場する昌平高校は辞退）を合わせた計30チームによるトーナメント方式で実施された。

優勝は正智深谷高校、準優勝に成徳深谷高校、3位に聖望学園高校と立教新座高校という結果であった。

2 決勝戦振り返り

深谷ダービーとなった決勝戦。5人のDFラインを形成してボールを奪い、素早く前線にフィードしてチャンスを窺う成徳深谷に対して、ピッチ全体を広く使って相手選手間の隙間を作ろうとする正智深谷という、「縦と横」を強く意識した試合構図となった。互いにアタッキングサードに侵入して好機は作り出すものの、相手の体を張ったディフェンスや精度を欠くプレーによって得点には至らない時間が続く。均衡を崩し、先制に成功したのは正智深谷。成徳深谷のロングボールによってDFからFWまでのラインが間延びし、右サイドでセカンドボールを拾った正智深谷MF⑧吉田が成徳深谷DFとMFのライン間に上手く入り込んだトップ下のMF⑩近藤へ斜めのパスを送る。MF⑩に対して遅れて釣りだされた成徳深谷右CB②増田の背後へ走り込んだMF⑱栗原がGKとの1対1を冷静に流し込んで生まれた得点であった。成徳深谷の縦に強いプレスを上手く斜めのパスでいなしてのゴールはおそらく狙い通りのものだった。対する成徳深谷は苦しい時間帯が続くが、68分に自分たちの得意のかたちから同点に追いつく。お家芸ともいえるロングスローから最後はMF⑩福島がゴールエリア前から左足を振りぬいて試合を振り出しに戻す。その後は一進一退の攻防を繰り返すものの得点には至らず、勝負は延長戦へ突入する。正智深谷は延長前半アディショナルにやはり左右の横への揺さぶりから成徳深谷を混乱させ、ペナルティエリアにドリブルで切り込んだMF⑩が冷静に横パスを選択し、MF⑧が倒れ込みながら流し込んで待望の追加点をあげる。諦めない成徳深谷は同アディショナルに競り合いのセカンドボールを回収し、最後はシュート性のクロスに反応した途中出場のFW⑪大森がゴールネットを揺らし土壇場で同点に追いつく。

試合はそのままPK戦に突入となり、キッカー全員が成功した正智深谷が優勝し、2年ぶりの第一代表の座を勝ち取った。

3 ベスト4進出校について

それぞれのチームが新人戦後から春先のリーグ戦開幕に向けて新しい取り組みを試みてきた様子が見て取れた。正智深谷はシステムこそ例年採用している1-4-2-3-1だが、キャプテンの

MF⑤小和田を中心に後方からGKを加えたビルドアップを多用している。また、2列目にスピード豊かなドリブルの選手がリズムを作る印象が強いが、今年度はトップ下でセンスが光るMF⑩を中心に全員の距離感を大事にしてグループで相手のマークのズレを生じさせている。

成徳深谷は縦に早い攻撃こそ例年通りだが、今大会は1-3-4-1-2で戦い、相手や流れに応じて5バックで後方をしっかり固める戦い方をしていた。

聖望学園は1-4-3-3だが、例年のポゼッションスタイルからターゲット選手や相手の背後など、より早いタイミングでゴール方向を強く意識したロングボールが増えている。また、セットプレーの精度や種類が増え、得点源となっている。

立教新座は成徳深谷相手にMF②堀口を中心に自陣深くでビルドアップをして相手を引き込んでから、縦にテンポアップする戦い方を採用していた。

いずれもリーグ戦序盤ということもあり、粗削りで精度や判断の部分でのミスが間々見受けられたが、非常に興味深い挑戦であり、変化であると感じた。今回参戦していない昌平や西武台が登場する総体予選や選手権予選でどのような試合が展開されるのか今から楽しみである。

4 おわりに

今大会において優勝した正智深谷高校はAグループトーナメントで初戦に栃木県代表の白鷗大足利との対戦となる。準優勝の成徳深谷高校はBグループトーナメントで初戦に山梨県代表の東海大甲府との対戦となる。ぜひとも本県代表として3日間、3戦を戦い抜いてもらいたい。

ここ数回の大会では埼玉県代表は互角かそれ以上に十分に戦えているものの、「ゴールを奪う・ゴールを奪わせない」という部分の強度や精度において他都県代表との差がでている。この観点からも千葉で開催される本戦でどこまで戦えるのか、しっかりと分析をして報告をしたい。